



下
古
屋
市
中
區
福
前
津
岡
馬
畊

帶
川
居
遺
稿

花之與月。各々無情。而在
以花賞春。以月賞秋。造
化果其無心歟。果其有心
歟。貴夫在人。不在造化。然
則花之與月。與人俱在造
化中。形迹之錯綜。二者
有待。與否。沙鷗。西人。



不好奇。不弄巧。斯集之成。
其為悲乎。其為喜乎。此我
之可知。而花之與月。與人一
舟子中。色相具之。造化端
便。覽斯集。可睹焉。
弘化乙巳。橋陽。

與田鳳文撰



氣韻をうつくしき自得の意持も既回し梅を
詠ふる人ししうきけれは白鳥を世にあは
しけりあはなきあはしめゆるをよきよき強て
うきものゆきまを羅ひてかのかうきを
らむと一語うちより授合梅華志と出梅風存
葉にあはしめぬ

沙鷗菰句集

春

尚早ふ松とてはうきあは朝の山
藤の蔭たはるくまもや初うきを
ふきまをうきしけり世は清きうきを
元日や一日たの鬼ふは乃 聯

雨風子梅 際らぶまゝし梅の花
まよひの梅もあまにむけわ
梅の花人そはくもあまし
うらぬやうめの種ニ下りうら
月と梅香の遠隔ハなかりあ
うらぬやうめの種ニ下りうら
まよひの梅もあまにむけわ
梅の花人そはくもあまし
うらぬやうめの種ニ下りうら

青柳のふゆりうらぬやうめの種ニ下りうら
まよひの梅もあまにむけわ
梅の花人そはくもあまし
うらぬやうめの種ニ下りうら

折柳

青柳のふゆりうらぬやうめの種ニ下りうら
まよひの梅もあまにむけわ
梅の花人そはくもあまし
うらぬやうめの種ニ下りうら
まよひの梅もあまにむけわ
梅の花人そはくもあまし
うらぬやうめの種ニ下りうら

乙花の引流くさく梅の事

梅を新八白老葉の夜を解

水も波を力部居の雀を始とむ

鳥をうらやまをあり母子を

古き子葉田を在る門の道あり

わつらわけくすくす昆布は塩

崎つけく外はく家一葉のさう

あましくくくく味や露をさけ

正月にまゝのあや塚のうら

まのまゝをくはくく流まをわ

けくく池よ葉りらむ底のうら

あましくくくあくのまけを葉の角

まをまや何なまをけん砂河原

けくく穴のうら降る小雨の程

雛子啼や池のまをくくあまら

たれまかろくまをくく葉の雛子

新原のいしをきく山人の雅

あつしつちん

みまのうらみあやのうらみとせけうらみ
こまねあやまのうらみとせけうらみ
あやまのうらみとせけうらみ

芳野

人のまをうらみあやのうらみとせけうらみ

岩屋水

あつしつちんあやのうらみとせけうらみ
あつしつちんあやのうらみとせけうらみ
あつしつちんあやのうらみとせけうらみ

ふたつちんあやのうらみとせけうらみ

南帝聖廟

あつしつちんあやのうらみとせけうらみ

あつしつちん

あつしつちんあやのうらみとせけうらみ

あつしつちんあやのうらみとせけうらみ

あつしつちんあやのうらみとせけうらみ

あつしつちんあやのうらみとせけうらみ

とていふはあはれなること

花の如くあはれなること

花の如くあはれなること

何ゆゑに

種々の聲に

ちりちり

とあはれ

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

とていふはあはれなること

倚石指見花

岩橋也 とうらの夜の日本まで
二層のうしろのなつかしいところ

録々谷

値うまき日とを皆しる様くの
なりしめ七つちりて着を
何よ此阿そまやほいて又はら
すまの河をぬも日乃ある様う南
うらまのくはまそをわにちる様

山はらぬ下戸の氷のむとまき
花をうらや火を影しはまの白
まきの山お為鳥よやうらひ
おまきし様うらまおしてま
うらまはうらまおまのなれを
ちらまよおまのあやるのま
野鳥のぬのほまあまやまは
花の枝下日と風とうはらま

無理のハハとねくさやの宿
まゝいゝちみくじぬ一極那
松山花見乃屋おきりう
はな知のまのつとて山やあ
まぬ葉のまみ種さきやたのこ
むら枝のちやとさきわ花の鳥
指込んくさぬま捕さし移すの事
物さしてちの殺向ふせられけり

あゝくく松の 様さるち事ら
悼 墓の乳

一人のあゝとわさるち
成成りるさるるの 碑
わゝと解ととと

むらとわとあゝとわさるち
磯村岡屋 終七方と名を

湖 鏡 柳 枝 流るるや川のはる

龍广社額

波々残余河入江此臨まう家

意を聞て水村少語数里ニ對す

近江中宿と居るをうけ表の雨

船とて大津くわる安土の山

草島や少ぬをいせしすゝるをい

石物と云はるわしたる雨とみ寄

也と備して歩歩のはまのこをむ

雨のまをいそむはまのこをむ

堰城

一 城をいそむはまのこをむ

壘よあるをいそむはまのこをむ

野市やおをいそむはまのこをむ

一日に掃をたもつをいそむはまのこをむ

山吹や古着をいそむはまのこをむ

草島所の遠隔とらむものみそむ

夏をあれと毎ちのわらわりの
うらやまをいれはまらうと
むしと志のつる憶書の目
うらやまありをんをわらわりの
うらやまのわらわりの
かた

夏をあれと毎ちのわらわりの
うらやまの浦

夏

人もわらわりの
脱控を巨槌のうらやま
漢佛ハ堂一はらの
おはれをいれはまらうと
うらやまありをんをわらわりの
うらやまのわらわりの
かた

植る田やあまのこころのこころ
場まはる水もあまのこころのこころ
休もあまのこころのこころのこころ

長如養中芭蕉堂新成辛丑
丑月十二日同眼供養式俳諧
之數句

みまの心を一日くは田乃あまのこころ
あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ
みまのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころ
肥舟や浮るあまのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころ

夕のほや露のなきしとて多雨一
腕のうしろしてまゝよはれぬの家
雨に粒も粒もあつてもまゝのま
夕まやるとのほやのまはれ下
ゆふまらやまゝのまゝのまはれし
う一照してほの風おしよまのま
池のうらまのまゝのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまの川

甚目寺請雨

るまやれぬのまのまのまのまの
竹のまのまのまのまのまのまの
うのまのまのまのまのまのまの
街道にまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

あゝあゝとふゆわ。さうさうと出さるる口
男中々く横こゝ真きるはる葉の風
ささきささきささきささきささきささき

勢田河御

振ふささきささきささきささきささき
ささき

秋

初秋の水に枝はくわたりいれ
けつ秋やあかしのささきの叶
爺婆あゝれいささきささきのささき
ささきささきささきささきささきささき
渡瀬を流るる戸口そ天比川
あゝささきささきのささきささきささき
ささきささきささきささきささきささき
降ささきささきささきささきささき

法も今く家のいふらふも亦様のお
連きもあく晴けりめまり蟋蟀
さしひてあふもならめさかしき
るさしきし引もさあく起るん
鶯郷のきしとあふもなり夢のゆれ
とららり坂城あつるや木の風
まゝ大や新なるもそれさけはらり

山学あつらふもあふもあつらふも

けれハ高野の隠き浮籠を鼓
日さすもあつらふもあつらふも
そのあつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふも

あつらふもあつらふもあつらふも

あつらふも

あつらふも

おもしろくして後そあめりさきさきの
そき枯れとわつとさきさきさき
西風やふもことおきさきの極
極のさきはさきの際けある。さきさきの
ゆささきのさきさきさきさきさき
先ん物をさきさきさきさきさき
膝すくさきさきさきさきさき
東さきのさきさきさきさきさき

新寺のうた

おもしろくも枯山作の児さき
さきさきと枯さきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
風のさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき

舟行

梅妻也出づるに長き舟にさる

うゝとまをりてふもなほ東の山

乙未七月湖西遊記

島山日記下号別記アリ甚句

から鹿や抱おるをねく石碛の舟

竹生嶋二句

ちる心とくしてさふふおまをり

女人——してんくは舞々り嶋の月

そよ風の沈うかぬく枯白如

ま——これ梅のななり西道江

三章 崎

松を後やおもひよりのま月れある

川を務のけしけいある日よりり我

粟津祖公羽墓前

まのいも梅——障のうの枯のあ後

是のうもいもあまのくあ後 我

七九句

佛子よん阿るわ日あや珍の珍

新日也を横院と好まを

懐かき

鶴あくと松の志と庵のらえけ

三日月也の月うけのこまの

云の月のあつとつる田あつ

うけと出る所のを——とや神を

是きりてあつとつる内ねの家

際とつるあつとつる月のあ

あつとつるあつとつる三老の

あつとつるあつとつる案の

わつとつるあつとつるあつと

あつとつるあつとつるあつと

あつとつるあつとつるあつと

あつとつるあつとつるあつと

月のあまほろのまきりかきるとして

はまのまきりくろくもや月をたもたも
うまのまきのうらまきわりぬけしの月

水上篇内

あまの川の哉あまのまきんかおれつま
あまのやまのまきりけやまの細あまのり
あまのまきりくろくもたもたもたもたも
あまの戸やまのまきりつま物をたの月

あまのれは又と出にうらまの月

あまのまきのあまのまきり

あまのやまのまきり風をたもたもたもたも

あまの川八御社のまきりつまのまきり

あまのまきりくろくもたもたもたもたも

あまのまきりくろくもたもたもたもたも

あまのまきりくろくも

あまのまきりくろくもたもたもたもたも

名月や花散りてあす付浅き烟
きしきしと桂色色けのほきみの雨
古水やを流るる一歩なるおんりのし
八月やあけの音く竹の市一交り
河浜をこゝろ空のいづれあふかえり
岨畑や雪のうしろからほよのさす
あつとくく名を解くわありの秋の月
深き山といふはさうらうと

新田やまきしとくおき家秋の月
木よ鳥ハ丹そ花の流るをうれ
家くつらよなを中と音りあけの時
乙る此まをう家出をよお植外
音おふおつとくくおの植の歌
時鐘をよ用あまうとくくや子孫の出来
ゆのやまは門なるや福一為
ゆれあるたのきんそつ植在

西風北流のくまの舟の橋一筋
まはしる花のつぼみにむすよみのわりのね
をわしと鳴る我をらるわりのね一筋
秋の日は少お出さく入おけり
あまのふれ秋の中よりま家一時
世話のまをく出る家とう流魂のな
まら子頼むし何とあそびをるは言ふお樂
ゆきとまききうも晴けりわめお嘉

流るる花のつぼみにむすよみのわりのね
をわしと鳴る我をらるわりのね一筋
秋の日は少お出さく入おけり
あまのふれ秋の中よりま家一時
世話のまをく出る家とう流魂のな
まら子頼むし何とあそびをるは言ふお樂
ゆきとまききうも晴けりわめお嘉

著持く神あるをみるを教くを
亦日あるあるや氷此二翻目
清みとて川に氷をまきりけり
おほえぬよ氷海より竹葉の子
そや中州の氷をそよもるる
繁く晴の氷を起八印の氷
陰よりくる氷地をさつ
氷いといふや見よ氷のいふ

暮らちうらるる氷や日の光をこ

枇杷指跡

乃もとおもふるる少きさうす
雪のあや志きりりきき毎乃山
けし雪の唇ふけり月夜多難
菊花小初雪よりぬき氷結
うまゆきや大木のくの一あま
まの雪の枝をけりて子わきり

きけり〜こや〜道わが台

〜や風雅勢も〜白切の池つれ

賀陶工白之七十初度

物のけぬお紙おまはよはるの家

年一契

脱〜りそき〜りあ〜る紙生て

尾之

乙巳年

尾州名古屋本町一丁目

風月堂孫助

同 本町四丁目

晴月堂宇兵衛



書肆

